平成27年度前期　全学教育科目
名大の歴史をたどる

第13回
名大史とスポーツ

大学文書資料室　堀田慎一郎

1

1
前身諸学校運動部の活躍

2

①近代日本の高等教育とスポーツ

◎西洋のスポーツ文化の受容
◎卒業生により中等・初等教育機関へ
◎「運動会」の成立
◎学歴エリートによるスポーツ
◎トップアスリートによる指導
◎スポーツ普及の拠点として

3

②「スポーツ八高」

◎校友会によるスポーツ活動
◎学寮対抗、校内スポーツ大会
◎選手制度の否定から推進へ
◎他校との対抗戦
◎八高運動部の活躍
　◇ボート部の全国大会３連覇
　◇インターハイで活躍した陸上競技部・水泳部
　◇草創期の日本バレーを担った排球部

4

③名高商とスポーツ

◎学友会によるスポーツ活動
◎東海の強豪、陸上競技部
◎甲子園大会で優勝した野球部
◎水泳部と清川正二の金メダル
◎学生横綱稲垣登
◎名高商グラウンドとスポーツ振興

5

④医学部前身学校のスポーツ活動

⑤名古屋帝国大学の運動部

⑥戦時下のスポーツ

6

◆八高から四高への電報（1941年）

電報文面（八高陸上部）
「不許可は当然　しかも決行せんとす
　委細面談　至急来られたし」

欄外メモ（四高陸上部）
「全国制覇目睫にせまりたる我が軍。
　八高眼中になく希望は大なりなりし為
　此の報受くるも動ぜず。八高戦無期
　延期を希望すとの返電す。」

2
戦後の名大と体育会
―1960年代まで―

①「全名大」への合流

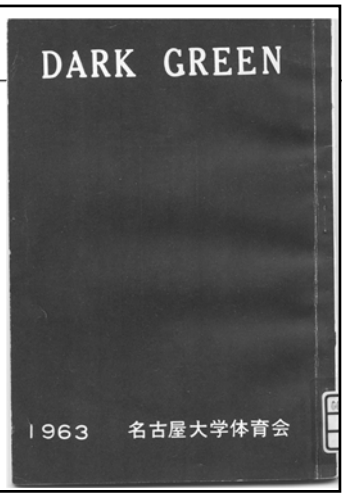
②名大運動部の新設・継承

③名古屋大学体育会の結成（1956年）

④機関誌『濃緑』の発行（1963年～）

◆『濃緑』第1号（1963.3）

「濃緑」＝ダーク・グリーンとは名古屋大学のスクールカラーである。濃は不屈・永遠を表わし、緑は若さを表わすものである。（巻頭）



⑤揺れる体育会像―会員のための体育会へ―

◎学生運動と学生のスポーツ熱
◎体育会のあり方への疑問
◎一般会員へのスポーツ普及への模索
◎クラス体育委員の設置と挫折
◎大学紛争と体育会―施設改善の要求―

3
1970年代の名大と体育会

①体育会全盛期の終えん

◎私立大学の増加と強豪の座からの退場

◎運動部員の減少
←「多様化・個性化」の時代
→同好会・サークルの増加へ
（「エンジョイ」するスポーツへ）

◎財政強化の模索

13

②体育会と社会の交流

③新しい運動部

14

4
1980～90年代の名大と体育会

15

①競技成績の低迷

②『濃緑』の変遷

③「夢の細道」から「地獄の細道」へ

16

④体育会から見た名大生気質

⑤体育会の組織改革

⑥名古屋大学体育会会長賞

17

5
最近の名大とスポーツ

18

①学外との対抗戦

◎七大戦（1962年～）
（全国七大学総合体育大会、（12～）６～９月）

◎名阪戦（1947年～）
（名古屋大学・大阪大学対抗競技大会、５～６月）

◎東国体（1952年～）
（東海地区国立大学体育大会、６～８月）

19

②名古屋大学体育会のイベント

◎須賀杯争奪駅伝競走（1964年～）
◎リーダーズ・アセンブリー（1960年～）
◎フレッシュマンズ・アセンブリー（1975年～）
◎名大祭のスポーツ大会
◎フレッシュマンズトーナメント（春季）、フットサル大会（夏季・冬季）、ソフトボール大会（秋季）
※山田杯争奪駅伝大会（1962～2009年、名大祭でおこなわれていた服装自由の駅伝大会）

20

③最近のトピック

◎第42回七大戦（2003年）で総合優勝
◎山の上陸上競技場のフィールドを全面人工芝に（2005年）
◎「舛名大」（田中周一さん、工学部卒）の大相撲入り（2006年、2011年引退）
◎駅伝大会での健闘（陸上競技部）
◎鈴木亜由子さん（2014年卒）の活躍
※2013年ユニバシアード優勝
◎七原優介さん（2015年卒）の大学野球日本代表選出

21

④高橋義雄講師の体育会への提言（2001年）

◎多様な参加形態、外部団体との連携
◎スポーツに関わる公開講座
◎スポーツ施設の地域への提供
◎1971年『濃緑』の体育会委員長の文章
◎スポーツを通じた、多様な感情・価値観を持つ人々とコミュニケーションできる人間の育成

22